

総括的に文章をとらえ、

中心をはっきりさせながら書き進めていく力を育む授業改善の報告（1）

長岡市立山古志小学校

教諭 相澤 勇弥

1 はじめに ー昨年までの児童の学びの履歴と今年度の課題ー

今年度は、昨年から持ち上がった4学年の子どもたちを担当している。まず、今年度の取組である「書くこと」に関する児童の実態を述べる。

（1）昨年の「書くこと」における子どもたちの学び

昨年は、書くことと読むことの往復の中から、「段落意識をきちんと通して、膨大な述べたい事柄を整理して書く力」「情報を整理して受け取る力」を育成してきた。その成果もあり、国語での学習が性の指導時の母への手紙や阪之上小学校の児童とお別れをする際のお礼の文集の作成等の場面で、ナンバリングをして述べたり段落の内容を始めの一文で知らせるトピックセンテンスを自然に使えるようになったりと獲得した力を活用している姿として見えた。

（2）昨年の学びの後の子どもたちの弱さ

以上のように、子どもは段落を作って書いていくことができるようになってきた。また、「話題提示」「問題提起」、その「答え」の段落までは内容につながりをもって書くことができた。しかし、その先の「まとめ」の段落になると調査時の感想を書き始めるなど、文章全体の内容を踏まえて総括したものになっていなかった。

また、調査情報などの整理を主な学習としていたため、子ども自身が書く事柄を作り出したり決めたりするということの育成が弱く、題材によって書き出しの速さや取材の量・質にばらつきが出る。また、並列的で情報の軽重がない題材で書いてきたことが多く、特に伝えたい思いがはっきりしない弱さもあった。

2 今年度の取組について

（1）重点的な取組の方向

今年度は以下の2点に重点的に取り組み、児童が書き方に自信をもち、学習したことを活用していきえるようにしていきたいと考えた。

- 話の内容を総括的にとらえ、「まとめ」の段落をつながりをもって書けること。
- 自分で伝えたいことの内容を決め、それが特に伝わるように書けること。

（2）取組の方法

前述のような弱さの要因として、以下の2点が挙げられる。

- ◆「問題提起」⇔「答え」の関係で情報を伝えきったと考え満足してしまった。（「まとめ」の段落まで構造を意識しきれなかった。）
- ◆何を伝えたいのかという文章全体のテーマを意識せず、事実情報の伝達に終始していた。（説明文は、事実の説明を通して「思い」や「価値」を伝えることができるという意識をもたせられなかった。）

そこで、2つの段階を設定した。

- ① “始め”と“終わり”のつながりを事前に決定してから、“中”を書く学習場面（段落では、「話題提示」と「まとめ」の段落から先に決めて書き出し、「問題提起」と「答え」の段落の内容を合わせるようにする場面。）
- ② 「想い」を明確にした説明文を書く学習場面（説明する内容のもつ問題を意識して、思いをもたせるようにする場面。）

この二つの段階を経ることで、“始め”と“終わり”の内容のつながりを確認し、“中”に入れる説明的情報を総括した「想い」として、「まとめ」の段落も内容につながりをもって書くことができるようになることと考えている。

（3）取り扱う文種について

段落のつながりを考える初歩に適しているのは説明的文章である。特に、見学等の説明文であれば、調査をすることで豊富に情報が集まる。こうすることで「書くことがない」という状態を防げ、文章表現のみに集中できる。②の段階では説明的文章を使いたい。

しかし、説明的文章を学ぶ初歩の児童には、説明文には事実の説明を通して伝えたい「想い」があり、それは事実を総括的にとらえることで読み取れるということに気付くことは難しい。「まとめ」の段落を書くためには文章にテーマをもてることが望ましいため、①の段階では学習に取り扱う文種として、説明的文章でなく、伝えたい「想い」をもちやすいエッセイにすることにした。

3 今年度の取組 — ①の段階の学習の報告 —

（1）単元名

「自分にしか伝えられない文章を書こう」—始め・中・終わりの内容のつながりを考えて書く—
（4学年・6月実施）

（2）ねらい

文章で伝えたいこと（テーマ）をもとに“始め”と“終わり”の段落から書き始めることを通して、“中”の段落では伝えたいことに応じた内容を選択するとよいことに気づき、文章全体が内容的つながりをもった文章が書ける。

（3）単元設定の意図

“始め・中・終わり”の関係を学ぶため、“始め”と“終わり”の内容的つながりを事前確保し、“中”の内容がそのつながりに整合するかどうかを確認する学習場面を設定した。段落の役割を明確に学習してきている子どもなので、「話題提示」と「まとめ」の段落から先に決めて書き出し、「問題提起」と「答え」の段落の内容を合わせるようにするという学習とした。

こうすることで、「まとめ」の段落（“終わり”の部分）は、“始め”と“中”を受けて総括した内容が書かれるのだということを実際の文章表現を通して獲得できるものと考え、この単元を設定した。

（4）指導の実際

①相手・目的とテーマの設定

山古志小学校に、新聞の原稿の依頼があった。テーマは何でもよく、将来の夢や普段思っていること等ということだった。このチャンスを逃さず、普段からたくさんの支援をいただいている山古志小から感謝の気持ちを表す機会だよと伝え、「今は自分が元気だとわかるようなこと」「山古志にいる自分にし

かかけないこと」「山古志の良さが伝わること」ということで、各自にテーマを決めさせた。

②文章全体で内容につながりをもたせる場面

115文字という制限の中で、短い文章であった。この制限に2つの良さがあった。一つは文章全体を見通しやすいこと、もう一つは事前に書き出した“中”に書く材料を二つ程度に絞る必要があることである。

まず、「一番伝えたいこと」という自分のテーマを一文で書かせた。そして、そのテーマで書きたいことを、「作文メモ」ということで事前に書き出した。

次に、このテーマに沿うように、“始め”の段落と“終わり”の段落を先に書いていった。子どもたちは以下のように書いていた。

A児《伝えたいこと》「犬をかっていて、見ていると元気が出るからこれからも大切にしたい。」

《始めの一文》

ぼくの家ではルクという
犬をかっています。

《終わりの一文》

ぼくは、こんな変でかわいいルクをこれか
らも大切にかわいがってあげたいです。

B児《伝えたいこと》「山古志は自然の中においしいものがある。」

《始めの一文》

わたしは、庭になっ
てグミが好きです。

《終わりの一文》

食べた後、口でたねをとばしたので、いっ
ぱいグミの木になってほしいです。

C児《伝えたいこと》「みんなが楽しむようなBOOKきっさをけいえいしたい。」

《始めの一文》

私のしょう来の夢は、Book きっさ
を山古志の森に作ることです。

《終わりの一文》

山古志の特長は景色がきれいで静かなことなのでお客さん
が本の世界に入って面白さがわかってもらえると思います。

このように、“始め”の段落で言いたいことをズバリ短く言い、それを終りの段落でまとめとして繰り返すようにし、学び始めの段階でもあるため、極端に内容をつなげた。ここで、C児の“終わり”の内容が膨らんでいる。C児に話を聞くと、“中”に「山古志は景色が良い」こと「私も本が好きで本を楽しんでほしいこと」を書くから、それを振り返るように書いておいたということだった。この話をC児から子どもたちに話してもらった。

このことで、“終わり”の段落は“始め”と“中”の内容を振り返る機能があり、内容的につながりを持たねばならないことが印象深く学べたようだった。

③“始め”“終わり”の一文で確保された内容のつながりに“中”に書くことが合致するかを検討していく場面

上のように書き、中の段落に書きたいことを決めて書いていった。文章制限が非常に短いため、はじめに書き出した「作文メモ」の中から、本当に必要な事柄を選ばなければならなかった。

B児は、『良さ』が自分の伝えたいことを中心だからと、よくないことが伝わることは選ばないようにしていた。例えば、「虫食いがあるといやだ。」「食べ終わると口の中がパサパサする。」「あまいやつとすっぱいやつがある。」等は入れないという様子であった。

また、書いた後に検討する際にも“始め”と“終わり”を通して、“中”の内容を選び直す姿もあった。A児は、飼っている犬の特徴を『変』なところと『かわいい』ところに分けて段落を作って書いた。“終わり”の一文に書いてあるとおりである。『変』の内容はドッグフードを食べないことという材料で内容が合致した。『かわいい』の内容に、初めは「かまないように練習したから、かまなくなった」ということを選んでいった。しかし、友達にかまないことがかわいいのはかわいさが伝わりにくいのではないかと指摘され、「知らない人が来ると大はしゃぎをして飛びつくところ」と書く材料を変えていた。

このように、一番伝えたいことに沿って“始め”と“終わり”が先に決められていることで、“中”に書く段落の材料を内容に沿って選ぶことができていた。

完成した作品は次のように内容的なつながりの良さが確保されていた。

《A児の作品》

犬の説明に「変」と「かわいい」という柱があることを示す。	ぼくの家ではルクという犬を飼っています。ルクは変だけれどかわいいところがあります。その理由が二つあります。	
「変」の部分		変な所はドッグフードを食べず、かつおぶしごはんを食べることで。犬なのに人みたいところが変だと思うからです。
「かわいいの部分」		かわいいと思う所は知らない人が来ると大はしゃぎする所です。とびついてしっぽをふる所がかわいいからです。
「変」で「かわいい」から元気がでるといふまとめにつながった。		ぼくはこんな変でかわいいルクをみていると元気が出ます。これからも大切にかわいがってあげたいです。

《B児の作品》

伝えたい夢のことを一言で言いきる。	私のしょう来の夢は、Book きっさを山古志の森に作ることです。	
山古志にBOOK喫茶を作る一つ目の理由		お母さんが「森でコーヒーを飲むと、景色がきれいだからおいしく感じるね。」と言っていました。
山古志にBOOK喫茶を作る二つ目の理由		また、私は3才の頃から本を読むのが大好きでした。だから、本を読みながらおいしいものを食べられるお店を考えつきました。
一つ目と二つ目の理由を合わせてその良さを改めてまとめて伝え直した。		山古志の特長は景色がきれいで静かなことなのでお客さんが本の世界に入って面白さがわかってもらえると思います。

(5) 成果と課題

《成果》

○4年生という段階に対して、課題の字数が少なく、短いため、“始め”“中”“終わり”での内容的なつながりを確認して書き進めやすかった。

○一番伝えたいことをもとに“始め”と“終わり”の段落から書き始めることで、“中”の内容を文章全体の内容的なつながりをもとに選択することができた。“終わり”の段落が、“始め”や“中”とつながりがあるのだと意識できた。

《課題》

◆115字という制限は短すぎた。書く内容を厳選する必要感をもたせることには役だったかもしれないが、接続詞を省略せざるをえなかったり、「話題提起」「問題提示」「答え」「まとめ」のようにきれいな段落を作るための妨げとなってしまうたりした。

◆今回の学習では“終わり”の部分が“始め”の内容をそのまま繰り返した形にとどまっている。今後、“終わり”の部分を「まとめ」の段落として、文章全体を総括的にとらえて振り返ったり、文章を通

して想いを伝えるたりすることができるように学習を進めていきたい。

4 おわりに

今回は、今年度の取り組みの方向の意図と第一段階の取り組みを報告した。第一段階の実践を通して、見えた成果と課題をもとに、次の実践報告につなげていく。

次の段階では総合学習と関連させ、より伝えたい思いをはっきりさせて書き進めさせる。また、文章量も 600 字程度と制限を長くして、この学習場面で培った力を活用してより長いものでも見通しがもてるようにしていく。